

発行 パルシステム山梨 長野 課題推進チーム

# 2023年度 てんとう虫君通信

第2号

お問い合わせ先

パルシステム山梨 長野 活動支援課 055-243-6327

カラー版はこちらから  
ご覧いただけます



## 課題推進チーム

今年度の課題推進チームは、組合員3名と役員6名で「お米をテーマに食料自給率向上や生産者を応援する取り組み」を進めてきました。

日本人の食生活が変化してきている現代だから、炊いたお米をそのまま食べるだけでなく、米粉の使用費や飼料米の取り組むなど、お米の消費を拡大する様々な提案として生産者から直接お話を伺いました。

## 飼料米はご存知ですか？

パルシステムでは産地と連携し、自給飼料米の取り組みを進めています。自給飼料米の取り組みを受けて生まれた商品には『こめたまご』『こめ豚』等があります。飼料の国産化を進めることで、自給率の向上につながります。

映画上映後の交流会では、この2品と、山梨県産の五町田エコロじいの白米・玄米のおにぎりを試食しました。みんなの「食べる」が自給率の向上に繋がる商品。ぜひカタログでもご覧ください。



## イベント 映画上映会 「お米が食べられなくなる日」開催！

3月2日（土）「お米が食べられなくなる日」上映会を、会場参加、オンライン参加を選べる形式で開催しました。映画の中で生産者は「このままだと遠くない未来には日本で米づくりができなくなるかもしれない」と語っています。映画視聴の後、パルシステム連合会米穀課担当者や映画出演者であるNPO法人生活工房 つばさ・游 理事長の高橋さんよりお米を取り巻く現状や生産者を応援する取り組みなどにについてお話しを伺いました。



パルシステムといえば『産直』。多くの組合員が耳目に触れるキーワードではないでしょうか。パルシステム連合会の佐野様より、前半はパルシステムの産直について、後半はお米に関する生産現場での厳しい現状などを解説していただきました。

パルシステムの産直品は特に農畜産物の比率が高く、米・卵・牛乳・鶏肉は100%、青果は98%、豚肉は92%が産直品です。また、農畜産物の産直産地数は全国で400か所以上！お米は37産地・19道府県、30品種・48銘柄と、各地の産直米を購入することができます（2023年パルシステム産直データブックより）。生産者や生産方法、出荷基準が明らかで、生産の履歴も公開されるパルシステムならではの産直品。特に米の産直は生産者と組合員の相互交流が40年以上前から続いています。

その一方で、農業の現場では、生産者の減少、高齢化、耕作放棄地の増加が深刻な問題となっています。また、社会構造の変化に伴い、人口減少や食の多様化でパン・麺類など米に代わる主食の選択肢が広がり、国民一人当たりの消費量は50年間で半減しています。

追い打ちをかけるように、燃料や資材、運送費等の生産コストの増加が深刻で生産者の所得は大幅に減少しています。

お話の最後に「一回でも多くお米を食べる機会を増やしていただきたい」との言葉がありました。これを聴いて、当たり前「お米を食べる」ことができる未来となるよう、持続可能な生産のための消費を意識したいと感じました。

佐野様のお話の次は、2009年から現在も続く「こめまめプロジェクト」において、生産者と企業を結び付けたコーディネーターである、NPO法人生活工房つばさ・游の高橋優子様よりお話を伺いました。プロジェクトでは埼玉県のある企業が、小川町下里地区の有機農家からお米を再生産可能な価格で全量買取し、それを給料の一部として希望者に現物支給します。継続的な販売経路が確保されたことで下里地区の販米農家がすべて有機農業に転換しました。高橋さんがパイプ役として生産者と消費者の間に生じるギャップ（米の品質安定や管理方法等）を解消したり、企業側に田植えや稲刈りから里山整備等にも関わってもらった事で、双方向の理解と信頼関係構築に貢献したりしました。

このプロジェクトはどこでも導入可能な事例であり、環境大臣賞を受賞しています。こういった取り組みが全国に広がると、安心してお米を食べ続ける事に繋がると感じました。



『五町田エコロじい』は、  
「年寄りになってもお米を作っていこう！」  
「原点に戻って地球環境に配慮したお米作りをしよう！」  
という思いを込めて名付けられました。



浅川さん

中野さん

## 内部学習会 五町田エコロじい、 生産者にインタビュー



今回は内部学習会として、山梨県北杜市で五町田米を生産している『五町田エコロじい』の浅川さんと中野さんにお話を伺いました。

### 五町田米について教えてください

五町田米は化学農薬や化学肥料を使わずに環境に配慮して作られた「こしひかり」。4週ごとにお届けする玄米・白米の予約登録と、独自チラシ「エシカル市場」で月1回販売しています。パルシステム山梨 長野向けの作付け面積は約4~5反で、昨年は3,300kg、ピーク時には3,900kgを出荷していました。

### 五町田米生産者の減少について教えてください

2003年に五町田エコロじいを発足、2004年からコープやまなし(現パルシステム山梨 長野)へ出荷を開始。当時40代1名、50代1名、60代3名、70代3名の8名で始めましたが、体の負担や高齢化、親の介護のため規模を縮小するといったことから辞める人が増え、また慣行栽培と異なる為に新たに仲間を増やすことが難しく現在2名の生産者で生産しています。

### 気候変動で影響はありますか？

昨年の夏の気温が高く11月まで暖かったため、日中の作業を減らしたこともあり、予定していた作業が遅れたり、暑いと草が伸びるのが早かったりとても大変でした。また、高温障害の対策として、花が咲いてから実が付くまで水温を下げ続けるなど作業が増えました。



今回、五町田エコロじいのお二人にお話を伺い、私たち組合員が生産者の現状を知り、理解することの大切さを改めて感じました。これからも交流を深めながら応援していきたいと思っています。

### 種はどうされていますか？

基本は自家採種をしていて、稲が大きな病気になったときや食味が変わったなど感じたときに、新たな種に更新しています。

### 種子法廃止や種苗法の改正で何か影響はありましたか？

今のところ特に影響はありませんが、専門家の話によると、この先、種採りが海外で行われるようになれば、現在ほぼ100%のお米の自給率も実質11%に下がってしまう可能性があるとのことで、そうならないように今から対策が必要であると危機感を感じています。

### 米の自給率が危うい状況についてお考えは？

国全体で日本の農業を守っていくための政策の強化や、一人一人が考えていく基盤をつくってほしい。現状は高齢化で離農する人が増えたり、無農薬での栽培が体力的に厳しくなっている方も増えていると思います。

### 組合員に伝えたいことは？

五町田米を始めて20年。年間契約の仕組みのおかげで安心して作ってこられたことに感謝しています。今後、この取り組みがさらに広がり、新しい生産者の仲間や購入してくれる組合員が増えれば良い。その年の気候などによりお米の出来栄が『良い時もあれば悪い時もある』ということ、組合員の皆さんにも理解してもらえると嬉しいです。

## 課題推進チーム一年間のまとめ

課題推進チームは、一つのテーマにつき一年間限定の活動なので、初動が大切です。初めの2~3か月で活動の大枠を決めて動き出さなければ、取り組みたいことがあっても時間切れになってしまいます。このチームは初めから熱い議論が交わされ、「ただお米を食べようではないアピールが大事だね。」「学習会で得た情報から飼料米にクローズアップしたら？」小さい子どもさんを持つメンバーからは、「米粉を使った料理イベントは？」など、真正面からではない発想が、飛び出してきました。その後は突き進むのみ。それぞれのメンバーが得意分野を生かして、どれも有意義な活動になったと思います。次年度の課題推進チームもメンバーが協力し合ってより良い活動がなされることを期待しています。

